

令和7年度修士論文

近世武家社会におけるワシ羽の価値

—北方地域からの供給と幕府・東北諸藩による入手・利用—

池田圭吾

要旨

ワシ羽は古代から現代に至るまで弓の矢羽として利用され続けてきた。近世武家社会においてもワシ羽は珍重され、その主な産出地は主に松前蝦夷地以北の北方地域であったと言われている。蝦夷地でのアイヌによるワシ猟に加え、山丹交易や千島交易によってさらに北の地域からもたらされたワシ羽は、松前藩によって買上げられ幕府や盛岡藩などへの献上・贈答品などとして用いられた。つまり、ワシ羽は近世武家社会と北方地域とを繋ぐ重要な産物の一つであった。

このように北方地域でワシ羽が大量に獲得された背景として、近世武家社会のワシ羽の需要を踏まえることが重要であると指摘されている。しかし、従来の研究の多くは北方地域におけるワシ猟や交易実態の解明に焦点を当ててきた。近世前中期の盛岡藩を事例として松前藩からのワシ羽の贈答やワシ猟について論じた研究や、幕府の鷹場でワシが駆除されていたことを指摘する研究、弓道史・武具史の観点から故実書に記されたワシ羽の種類について検討した研究などがあるものの、武家社会における贈答品としての価値や入手・利用実態などは依然としてほとんど検討されていない。そこで本稿では、主に幕政・藩政史料を用いて、松前藩によるワシ羽の献上・贈答、幕府・東北諸藩におけるワシの駆除・狩猟およびワシ羽の利用実態という観点から近世武家社会におけるワシ羽の価値を明らかにすることを目的とした。

第1章では、松前藩によるワシ羽の献上・贈答を通じたワシ羽の供給の広がり示すとともに、献上・贈答品としてのワシ羽の価値や北方地域におけるワシ羽の産出状況との関連性について検討した。ラッコ皮と並んで北方の産物としての由緒を持ち、松前藩の献上品として欠かせない産物であったワシ羽は、将軍への献上に加えて将軍継嗣や幕閣への献上・贈答品としても用いられた。また、盛岡・弘前・仙台・秋田・八戸・会津藩などへの贈答を通じて、北方地域のワシ羽が東北諸藩へ供給されていた。参勤交代のための領内通行時の御礼としてワシ羽を贈られたのは、藩主や上級家臣に限られており、贈答を通じて結果的にワシ羽の権威性が維持・強化されていったといえる。特に盛岡藩への贈答事例について詳細に検討し、蝦夷地においてアイヌが狩猟によって入手したワシ羽の数や松前藩による交易価格、さらには「真羽」を最上級とする伝統的価値観が、贈答品としてのワシ羽の価値を規定する要因となっていたことを明らかにした。

第2章では、東北諸藩におけるワシ猟の事例として、盛岡・弘前藩におけるワシ猟の制度と実態について検討した。盛岡藩は、近世前中期には「鳥打」「鷺打」の藩士を派遣していた。18世紀半ばには、藩から猟師に対してワシ羽の上納を求める仰せが出された。それを受けて、18世紀後半にはワシ猟を専門とすると推測される宮古代官所の猟師が、オジロワシやオオワシが渡来する冬期に、海岸または河川においてワシ猟を行い、ワシ羽を安定的に上納するようになり、その上納手続きや代銭の価格なども確立していた。一方、弘前藩では近世前中期にはアイヌや鷹侍場がワシやワシ羽を上納した記録が確認できる。18世紀半ば頃からは藩の御用となるワシ羽が不足する状況が続いており、町同心や殺生免許を持つ藩士らを派遣してワシ羽の上納を促す仰せが出されていた。しかし代銭が下賜されず手間もかかるワシ猟を行うことに藩士たちは積極的では

なかったと推測され、弘前藩は代金を新たに定めるなどワシ羽の上納をさらに促すための制度を整えた。以上のことから、両藩の領内におけるワシ猟は、藩がワシ羽を入手する手段の一つとして重要な位置を占めていたと評価できる。

第3章では、①幕府の鷹場におけるワシの駆除実態の解明、②駆除されたワシの同定、③駆除によってワシ羽を入手していた可能性の検討を行った。従来の研究で「羽田の鷺打」として知られていた幕府鉄炮方の井上家による江戸湾の西岸地域でのワシの駆除に加え、同じく鉄炮方を世襲した田付家が江戸湾の北岸地域においてワシの駆除を実施していたことを明らかにした。「鷺打」の記録は享保年間にも確認できるが、19世紀前半頃から鷹場に生息する鳥類を保護することを主目的として継続的に実施されるようになる。毎年冬期の11月下旬から12月中旬頃に開始されたワシの駆除は、江戸の人々にとって冬の風物誌の一種であったと考えられる。駆除されたワシにはオジロワシが含まれており、幕府に献上されて「矢羽の御用」となることもあった。

第4章では、矢羽・贈答品・能の羽団扇という三つの観点から、従来ほとんど検討されてこなかった近世武家社会におけるワシ羽の具体的な利用実態を明らかにした。ワシ羽は非常時の備えのための征矢として用いられたほか、儀礼に用いる藩主の征矢や、関所などの装飾用の征矢として利用された可能性も考えられる。また、ワシ羽は松前藩から幕府・東北諸藩への献上・贈答に留まらず、諸大名から将軍への献上や、大名・旗本間の贈答、家臣や領民から藩主への献上、さらには公家社会への贈答も含めて複雑な贈答関係が成立していた。本稿では、仙台藩がワシ羽の贈答の中継地として機能していた可能性や大陸側からの流通経路が存在した可能性を仮説として提示した。さらに、「真羽」や「上鷺尾」と呼ばれる高品質のオオワシの羽は、能の羽団扇として江戸で加工され、幕府や仙台藩に献上・贈答されていた。松前藩が献上したワシ羽の羽団扇は、松前蝦夷地の特産物であるとともに江戸幕府が「式楽」として保護した能楽に欠かせない道具でもあり、幕府との関係を深めるための献上品として重要な役割を果たしていた。羽団扇の献上は遅くとも享保二年頃から、献上自体が簡略化される幕末まで継続されたと推測される。

終章では、第1章から第4章までの各章の結論を述べた後、本稿全体の結論を述べた。第一に近世武家社会におけるワシ羽は、単なる松前藩の贈答品としての価値に留まらず、実用的・儀礼的・装飾的な価値があった一方で、鷹場で駆除される「害鳥」としての側面もあった。また、ワシ羽の需要が武家社会を媒介として公家社会や芸能分野にまで及んでいることを指摘し、公家社会への供給は中世から近世への連続性がある一方で、羽団扇の贈答は、能が「式楽」として保護された近世に生まれた新たなワシ羽の贈答利用であった可能性が高いと結論付けた。第二に、幕府・東北諸藩におけるワシの駆除・狩猟の実態を明らかにした本稿の成果は、中世史や考古学の分野においてワシ羽＝北方に生息するオオワシの羽とみなされてきた従来の認識を相対化するものであると結論付け、ワシ羽の種類に関する慎重な議論の必要性を指摘した。

最後に今後の課題として、①実物資料の調査、②ワシの種類の見直し、③贈答による流通構造の把握、④商人による流通実態の解明、⑤諸藩の鷹場におけるワシの駆除実態の解明、⑥生きたワシの価値の解明の六つを挙げた。